

最優秀賞（一般部門） 日吉えり子

心に残る技士さん

一九九一年から透析とうせきを受けております。心に残る技士さんとの出会いは、二〇一九年三月、肺ガン手術のために、とある病院に入院した時の事です。

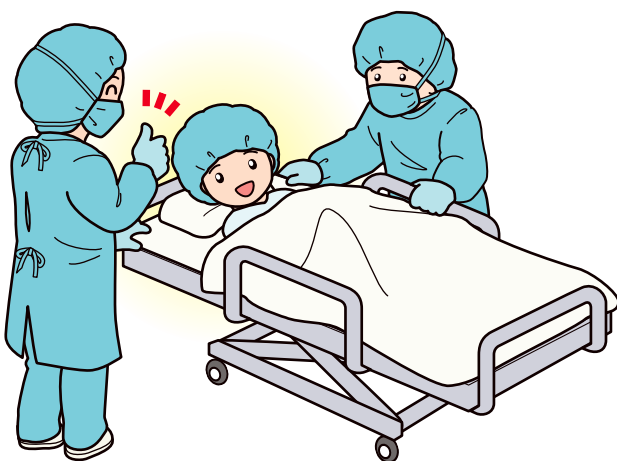
三月六日初診、十一日入院、十五日手術。「お願いします」の意思表示後、びつくりするほどのスピードで、日程が決まりました。無事に生きている、とは、こういう幸運の積み重なりなのでしよう。暗い透析の歴史の中で一筋の光明のよう
な思い出です。

入院後、初めての透析時、穿刺せんししてくださったのがSさんです。「いつもは手術室勤務ですが、今日は久しぶりに透析室です。もしかしたら、日吉さんの手術も担当するかもしれません。手術室で会ったら声をかけてくださいね」。あの独特な静寂の中、お顔がわかるはずありません。精一杯

ふんばって入室した手術室で聞こえた、「日吉さん、頑張ってくださいね」の声。ありえない。私の名前を呼ぶ声。あの時の技士さんだ！見知らぬ土地で肉親のような声。ありがたかったです。緊張も不安も消えるほど救われました。

退院前の最後の透析時、手術室の件をスタッフに話しお礼を伝えては来ましたが、冊子で作品募集の記事を目にして文字にすることを選びました。

医療技術は日進月歩です。AIがどんなに進んでも人の心には届きません。心が熱く癒やされるのは人の声です。どうか人の心を持つ医療者であり続けてほしいと願っています。



優秀賞（臨床工学技士部門） 長谷川 竜馬

過去の自分へ贈る言葉

「臨床工学技士りんしやうこうがくしという仕事はね、主に機械を相手にする仕事だから、患者さんやご家族さんから感謝されることはないよ」。十年前、就職を控えた大学生の私に、同級生はこう言いました。臨床工学技士という職業に、希望を持って就職活動をしていた私には、痛烈な言葉であったことを今でも覚えています。

臨床工学技士として働き出したある日、病院の廊下で「こんにちは。母がいろいろとお世話になりました」と、ある女性から声をかけられました。「腎不全じんふぜんの母が透析とうせきでお世話になりました。母の面会に行くと、臨床工学技士のあなたの事がよく話題に出てきました。透析中に親身になってお話を聞いてくれるし、気分が悪いと言ったら装置の設定を医師の方と話し合ってくれたり。常に優しいあなたがいってくれるから辛い透析も頑張れると、母は私に言っていました。こうして廊下で偶然あなたに出会えたのも、今は天国にいる母が

お礼を言いたがっているからなのかもしれない。母に代わってお礼を言わせてください。母を支えてくれて、ありがとう」

そう言うと、女性は笑みを浮かべて去っていきました。



「ありがとう」という言葉は、とてもありきたりな言葉かもしれませんが、私にとってはどんな言葉よりも、言われると心に残る言葉であると感じた瞬間でした。ひたすら仕事に打ち込み、奮闘していた日々の頑張りが認められたような気がして、私の心が温かいもので満たされていく感覚がありました。お礼を言われたのは私のはずなのに、逆にその女性と女性のお母様の言葉に力をもらい、私の方こそお礼を伝えたくなったのを今でも覚えています。

もし、十年前の就職を控えた自分に向けて言葉を贈る事ができるとしたら、このような言葉を贈りたい。「臨床工学技士という仕事はね、患者さんやご家族さんから感謝される、そんな仕事だ」と。



優秀賞（学生部門） 鶴田悠佳

笑顔があふれる透析室

私は臨床実習りんしんじょうごくぎくしを経験し、患者さんと臨床工学技士りんしんじょうごくぎくしの間が「患者と医療従事者」というだけではないと感じました。

臨床実習の最初は透析業務とうせきぎょうむから始まりました。私は、週三四時間の透析業務が臨床工学技士にとっても患者さんにとっても流れ作業のようになっていっているのではないかと思っていました。しかしふたを開けてみると、患者さんは笑顔で「おはよう」と挨拶をして透析を受けに來ていたり、透析の開始、終了時には会話を楽しんだりしており、臨床工学技士も笑顔で患者さんを待っていたり、自ら患者さんに話しかけたりしていました。透析室がただ治療をする、治療を受ける場所ではなく、患者さんと臨床工学技士の両方に「笑顔」があふれる場所になっていました。



なぜこのように雰囲気が良いのか疑問を持ちましたが、実習を進めていくうちに二つ理由があると思いました。

一つ目は、コミュニケーションのとり方です。「おはよう」「お疲れ様」などの日々の挨拶のときも透析開始・終了時の会話のときも必ず相手の目を見たり、患者さん一人ひとりに合った接し方をしたりすることで安心して治療を受けられるようにしていました。このようなコミュニケーションの積み重ねが患者さんとの信頼関係につながっていくのだと思いました。

二つ目は、業務に「慣れ」がないことです。実習指導者の方から「長い間関わっているからもちろん名前も顔も覚えていいる。それでもミスをする恐れもあるから必ず名前を聞くようにしている」と聞いたことが印象に残っています。機器が自動でも絶対はないと患者データや治療条件が合っているかなどの確認を怠らず、チェックを何重にもしていました。このような確認が安全な治療につながっていくのだと思いました。

治療に直接関わることも関わらないことにも、患者さんのために精一杯サポートする姿勢がとても大切であり、その積み重ねが「笑顔」があふれる透析室を作り上げたのだと実感しました。

